



## 「ステファヌス版」以前以後 『プラトン著作集』の伝承史から

大学院文学研究科教授

内山 勝利

1578年、スイスのジュネーヴで刊行されたステファヌス版『プラトン全集』は、初期印刷本の中で、今日なお研究上の実質的な意義を持ち続けている数少ないもののひとつである。大型フォリオ（二折）判の3冊本で、合計2000頁を越える。その一本が本学文学研究科閲覧室の田中美知太郎文庫にも所蔵されているが、時代による状態劣化のために、背の綴じ目がこわばってページを開くこともままならぬ状態になっていた。長い間の気掛かりだったが、昨年ふとしたきっかけから、工芸製本家の山野上さんの手を煩わせ、現在わが国でこれ以上望むのはむずかしいほどに、たんねんな修復をしていただくことができた。元の装丁がいつごろのものか判然としないが、それ自体に歴史的価値が認め



修復されたステファヌス版『プラトン全集』。

られるようなものではなかったので、表紙などは（極力原装に即しながら）新しい素材に改められた。また修復以前の状態では、本来3分冊のはずのものが2冊に合本されていたり、わずかな乱丁も

見つかったりもしたが、これを期に当初のあるべき形にもどしてもらうことができた。何よりもありがたいのは、美しくなった本書を破損の不安なく閲覧できるようになったことである。

\*

ギリシア・ローマ古典の古い印刷本の多くは、今日ではおおむね研究的に参照されるべき「テキスト」としての役割を終えて、むしろ記念碑的意義（あるいは尚古趣味的価値）によって保存されるとすればされるべきものとなっているのが実情である。後で多少触れるように、19世紀を中心とする近代古典文献学の隆盛の結果、そこで確立された精緻な原文批判の手續を踏んでいない旧来の印刷本は、研究上通用しないものになってしまったからである。たとえば、ルネサンス期最大の書肆アルド・マヌツィオ（アルドゥス・マヌティウス）が16世紀初頭にヴェネツィアで印刷刊行したきわめて多数のギリシア語原典は、ほぼすべてが西欧における editio princeps でありながら、不十分な編纂と校訂のために、ほとんどがいつしか顧みられな



なくなってしまっている。

はじめてギリシア語版『プラトン全集』を出版したのもアルド（アルドゥス）であった（1513年）。しかし、これも不完全で不備欠陥の多いものにとどまっており、広く流布するには至らなかった。かわって西欧の古典学世界に定着し、長く「標準版」としての地位を占めつづけたのが、それより半世紀以上のちにアンリ・エティエンヌ（ヘンリクス・ステファヌス）によって刊行されたステファヌス版『プラトン全集』にほかならない。これは文字通りの *opera omnia* であるとともに、本文校訂においても今日なお無視しえないほどの高水準を達成している。それだ

けに、（おそらく長年にわたって）相当部数刷られており、現に世界中に残るもの何部というような大稀覯本ではないが、文献としての価値は高い。16世紀末以降19世紀に入るまでの200年余の間、西欧の哲学者や知識人たちが目にしたプラトンのテキストは、もっぱらこの版だったはずである。たとえば、18世紀啓蒙思想家の一人、ディドロが『ソクラテスの弁明』を仏訳するのに用いたのも明らかにこれであった（以前ある機会に必要あって対照したことがある）。また、シェリングやヘーゲルなどは、南ドイツのツヴァイブリュッケンで1781年に出版されて広く流布したピボンティウム版（出版地のラテ



ステファヌス版『プラトン全集』の版組（『ティマイオス』冒頭頁）。左欄にステファヌス校訂のギリシア語原典、右欄にヨハネス・セラヌス Jean de Serres によるラテン語訳を収め、中央に10行ごとの目印としてAからE（この頁はDまで）の符号を付す。ちなみに、セラヌスは相当量の註解、長文の序なども執筆しており、本来なら共同編纂者としてステファヌスと併称されていいはずだが（事実、扉頁にはそう銘記されている）、この古典学者の存在はすっかりかすんでしまっている。彼のラテン語訳はかなり問題の多いもので、ステファヌスはいろいろとクレームをつけるが、セラヌスは聞き入れない。その結果、本書の欄外註にはしばしば両者の意見の違い（ステファヌスによる誤訳の指摘と、それに対するセラヌスの意固地な反論）が両論並記的に組み込まれるという摩訶不思議な体裁をきたしている。二人の共同作業は、かってして順調とはいえず、訴訟沙汰までからんだ、いかにも折合いの悪いものだった。この間の経緯には、U. エーコあたりの好みそうなドラマがいっぱいである。

ン語風呼称）を手にしているのだが、これも事実上ステファヌス版テキストをそのまま流用したものである。近世哲学史研究において（のみならず思想史・文学史研究においても）、プラトンのテキストとの関連が問題となるような場合、厳密を期するためには、今日の流布版とは異読の少なくない、こうした同時代のエディションを前提に考察・議論する必要があるだろう。

「標準版」ということには、もう一つの重要な実際の役割がある。西洋古典学においてそう呼ばれるものは、今日でもまさに当該著作の共通基準としての役割を担い、たとえば著作を引用・参照する場合、「標準版」

の頁付けや行数などによって所定個所を指示するのが全世界的な約束事となっている。この分野で（のみ）十全に確立された、きわめて有用な慣行と言ってよかろう。以後に刊行されるすべての版はもとより翻訳などにおいても、それとの対照を明示する方式が行き渡っている。試みにギリシア・ローマ古典の邦訳書を開いてみれば、それが手軽な文庫本であったとしても、必ず各頁の欄外に「標準版」との対応を示す数字が付されているはずである。そして、プラトンの場合には、その基準となっているのがステファヌス版にほかならず、所定個所は同書の頁付けと各頁に10行ごとに付されたA - Eの記号

で指示される（たとえば『ソクラテスの弁明』29Bとあれば、ステファヌス版29頁の11行目から20行目の間を指し、むろん必要とあればさらに細かく当該行数を数字で明示することもできる。もっとも、これは上述のように3巻本なので、些細なことながら、作品名こそ違え、同一頁付けが3箇所ありうる）。付言すれば、活字印刷本の登場による大きなメリットの一つは、場所や時を隔てた多数の人たちが、容易に共通のテキストを共有して比較参照できるようになったことである。「標準版」の取り決めがその便宜をさらに高めることは、言うまでもないであろう。

\*

プラトン（前427 - 347）の著作は、そのすべてが今日まで伝わっているものと信じられている。問題ありとすれば、後代における偽作の混入をどう見積もるか、ということだけだと言っている。今日にまでつながる形での『プラトン全集』は、紀元後1世紀初頭のローマにおいて、トラシュロスによって編纂整備された。そのときすでに6篇は「庶出」著作（notheuomenoi）に数えられ、『全集』に纂入されてはいるものの補遺扱いされている。のみならず、トラシュロスがギリシア悲劇の上演形式になぞらえて9つの「四部作集」に纏め上げた36篇のうちにも、少なくとも数篇については、どこまでを「真作」として許容すべきかが問題として燻りつづけている。とはいえ、跡形もなく散逸したものが圧倒的に多い古代ギリシアの文学遺産のうちで、これはきわめて特例的な幸運にめぐまれたケースの一つである。

ここで伝承事情の詳細にわたるゆとりはないが、二千数百年前に書かれたものが今日まで伝えられることの困難は容易に想像できよう。さしあたり伝承媒体で見れば、おおよそ最初の1000年間はパピュロスに筆写された古代卷子本、つづく1000年間は羊皮紙に筆写された中世冊子本によって、ようやくグーテンベルクの時代にたどり着くのである。この間、とりわけパ

ピュロスの耐久性は脆弱であったから、初期の1000年ほどは、少なくとも100年に一度くらいの割で、どこかで新たに筆写されることが系統的に連続しなければ、その中途で湮滅していただろである。同じギリシア哲学分野から一、二の例をあげれば、われわれの手にしうる『アリストテレス全集』とは、実際には、複雑な経路を辿って伝わった彼の「講義ノート集」のようなものだけと言っていい。比較的若いころに彼が公刊した多数の著作は、（紀元後1世紀のキケロなどが熱心に読んでいたことまでは分かっているにもかかわらず）すべて失われた。さらに、デモクリトス（古代原子論の大成者、前5世紀）の場合には、「学問の五種競技選手」とあだ名されたように、きわめて多様な分野にわたってきわめて多数の著作を残したにもかかわらず、「デモクラテス」の名で伝わる倫理的アフォーリズム集を別にすれば、後代著作家によるわずかな数語の引用語句のほかには、何も伝えない。

今日まで伝承された古典作品には、ごくわずかながら古代パピュロスの発掘から直接復元されたものもある（アリストテレスの『アテナイ人の国制』はその一例）が、むろん大部分は中世に修道院で筆写された羊皮紙冊子本を経由している。その移行過程でも恣意的な取捨選択が働いたことは言うまでもない。プラトンについては、ここでもさいわい筆写が盛んになされ、そうした中世写本ないしそのコピーが現在200以上知られている（プラトン著作の若干ないしわずかな部分を含むだけのものが大半だが）。それらは、中世のキリスト教的ギリシア・ローマ文化圏（あるいはビザンツ文化圏）の各地僧院などで筆写所蔵されていて、ルネサンス期の古典文化復興の機運の中で、西ヨーロッパにもたらされたもの、さらにそれらから（ルネサンス期に）転写されたものを合わせた数である。「中世」写本とはいえ、むろん後者のほうがはるかに多いのが実際である。

ルネサンス後期に出版された古典作品の初期印刷本は、基本的には、すべてそれら中世写本

のいずれか一つをもとに活字化したものである（写本の原文批判的扱いは、のちの近代古典文献学の成立をまたなければならぬ）。プラトンのアルドゥス版もステファヌス版も同様で、ともにヴェネツィアの聖マルコ寺院に収蔵された筆写本（今日T写本と呼ばれるもの）の系統を引いた一本によって、T写本は南イタリアないしシチリア島のどこから当地にもたらされたものと伝えられ、近代



画期的だったアルドゥス版のギリシア語活字（アリストパネス『鳥』の冒頭部）

の文献学研究によれば、筆写年代は10ないし11世紀、プラトン写本のうちでもとりわけすぐれた数本の一つと見なされている（伝来する最古のプラトン写本は、9世紀末ないし10世紀初頭のもので、パリ大学にあるA写本、オックスフォード大学にあるB写本がそれである）。なおステファヌス版の著作配列順は、トラシュロス（後1世紀）の編纂に由来する伝統的な「四部作形式」にもとづくもの（T写本を含めて、中世有力写本は多くがそれに準拠している）とはまったく異っていて、独自に6部門立てした「体系」的配列を試みたものになっている。おそらくルネサンス期の新プラトン主義的哲学観を反映した新編集の結果なのであろう。

\*

さきにも触れたように、ギリシア古典の活字本刊行は、ラテン語系の版本に較べて、半世紀ほど遅れて始まった。ギリシア語作品の読者層のうすさに加えて、活字版組みが煩雑だったせいもある。ギリシア語の基本的な字母自体はローマン・アルファベットより少ないくらいだが、テキストにはアクセント記号などの補助記号を頻繁に付加していく必要がある。それらを適正に活字組みするためには、ラテン語に数倍する労力と技術が要求され、校正はさらに困難だったにちがいない（今日ワープロでギリシア語原文を打ってみれば、おおよその察しはつくだろう）。書肆アルドゥスがギリシア古典を本

格的に出し始めるにあたって、そのシステムを新規に確立し、「アルドゥス式活字セット」なるものを考案したことは、本来画期的な事績だったはずである。この版を見ると、各字母が明確に活字化され、しかも美しい統一的な字体をなしているのが一目瞭然である。これはいかにも当然のこのように聞こえるかもしれない。しかし初期の印刷本は中世筆写本の代用産産化をコンセプトとしていたから、むしろ可能なかぎりそのヴィジュアル感覚を再現することが重視されていた（筆写本の体裁をそのまま活字化しようとしている点では、アルドゥス版も基本的には変わらないが）。グーテンベルク聖書の場合、特に良版では部分的に肉筆筆写や見事な版彩色が施されているのもそのためである。印刷字体にもそれは反映されて、ギリシア語については、各文字が流暢な筆記体を模倣するとともに、さまざまな複数文字の組み合わせを一体化した、一種の連綿体風装飾文字（「連字」といわれる）をそのまま活字化するような風潮が長らく優勢であった。機能性重視のアルドゥス式活字セットは、すぐには定着しなかった。その合理性と読みやすさは、どうやら時代を先取りしすぎていたのであろう。

ステファヌス版を見ても、なるほど各単語が一筆にペン書きされたように活字組みされていて、一見して活字印刷本とは思われない印象のものになっている。それを「鑑賞」するのも初

期印刷本を手にする楽しみの一つではあるが、実用的には必ずしもそぐわない凝りようだとも言わざるをえまい。17世紀に入って、ようやく今日にまでつながるギリシア語活字の基本型が定まった(R.ポーションによる)とはいえ、その後も比較的長く筆写本の雰囲気をも温存しつつけており、19世紀に降っても、しばしばなおいくつかの連字が残されている。現在われわれの使用しているギリシア語活字システムが、それらに較べると、きわめて簡潔で読みやすいものになっていることは一目瞭然である。もっとも、多少の贅沢を言えば、その機能的簡明さが、ときには、いかにも美的配慮に欠けた素っ気ないものに見えることも否めないところではある。

\*

以下は、ステファヌス版以降の経緯である。

近代西欧に古典研究が盛んになるにつれて、よりよい古典テキストを求めて、新手法の古典文献学が確立されていく。そこで追求された精緻な原文批判においては、「テキスト校訂は複数写本の比較校勘によるべし」(Fr.A.ヴォルフ、18世紀後半)が基本原則とされ、また同一著作に多数の中世写本が伝存する場合、それらの間の臨写関係を推定して整理する「系図法」によって有力写本を決めることが主要な作業となった。この方法は、すでに15世紀の名高い人文主義者エラスムスによって提唱されていたものであったが、それを十全な手順として確立し、実際に着手したのは、ヴォルフの弟子K.ラッハマンであった。プラトンの著作は、当然ながら、この時代の古典文献学における最も顕著な研究分野をなした。18世紀末から19世紀を通じて、前述のように、ほぼ200の写本の存在が確認され、相次いで調査された結果、「系図法」的には、それらがおよそ7つの親写本 (archetype) に遡源するものとして整理づけられた。裏返して言えば、200ほどの現存プラトン写本は、すべてそれらのいずれかから派生したものであることが確認され、したがって校訂は主としてそ

れら7つの比較を柱にして行われることになる。さきに挙げたA、B、Tの記号を付されたものは、いずれも最も重要な親写本の位置を占めるものである。ほかに、ウィーン大学所蔵のW写本(12世紀か)、Y写本(14世紀か)、F写本(13世紀か)、ヴァチカン図書館にあるP写本(11世紀か)などがそれにあたる。これらは年代的には(さきの三者よりも)新しいが、A、B、Tが結局は中世初期に想定される(すでに失われた)同一写本から派生しているものと見られるのに対して、W、Y、F、Pはそれぞれ系統を異にした独自のルーツに遡るものとして、A、B、Tへの対抗的意義が評価され、近年の校訂ではいっそう重要視されている。(ただし、これらのどれ一つとして、プラトンの全著作をまとめて伝えているものはなく、ごく大まかに言えば、B、T、Wはトラシュロス編纂順の前半部、AとFは後半部に対応し - いずれも元来は2分冊写本の片割れだったのである -、YとPはともに3割ほどの作品数を含む「選集」である。)

こうした古典文献学の黄金時代を主導したのは、ヴォルフやラッハマン(先述)の薫陶を受けたドイツの古典文献学者たちであった。中でもI.ベッカーは、体系的な校訂の確立と精力的な活動によって広く知られている。彼は61年間にわたってベルリン大学教授の職にあったが、その間大学に姿を見せることはまれなほどで、もっぱらヨーロッパ各地を渡り歩きながら写本の調査に費やす日々を送ったという。まずは「量」(写本の数)の充実を第一に心がけたベッカーは、おおまかながらも天才的な早業で、当時知られていたほとんどの古典関係写本に目を通している。校訂済みの各写本にアルファベットなどの略号を振り当てて異読を整理する方式を体系的に始めたのも彼であった。ただしプラトンの場合には、調査につれてその数があまりに多数に上ったために、ついにはドイツ語のヒゲ文字などまで動員した揚げ句に、收拾のつかない有様におちいってしまった。これまでに

も言及することの多かったA写本、B写本などの略称も、したがって、ベッカーの方式に倣ったものではあるが、今日では、A写本のほかは、いずれも彼自身が割り当てた符号とはまるで対応しないものに改められてしまっている。彼としては「誇るべき」残念な結果ということになるうか。ついでながら、『アリストテレス全集』については、彼の編纂したベルリン・アカデミー版（1831年刊）が「標準版」とされ、一般にそれは彼の名を冠してベッカー版と呼ばれている。

しかし、それらプラトン関係の有力写本のうちでも特に古くてすぐれたB写本については、ベッカーは十分に活用することなく終わった。この写本は、実は19世紀になってはじめてその存在が知られるに至ったものである。エーゲ海のパトモス島でそれが発見されたのは、古典文献調査（あるいは写本獲得競争）たけなわの1801年のことであった。その唐突な出現は、プラトン写本研究史における最もドラマティックなエピソード、というよりも一つの「事件」に類する波紋を広げていく。

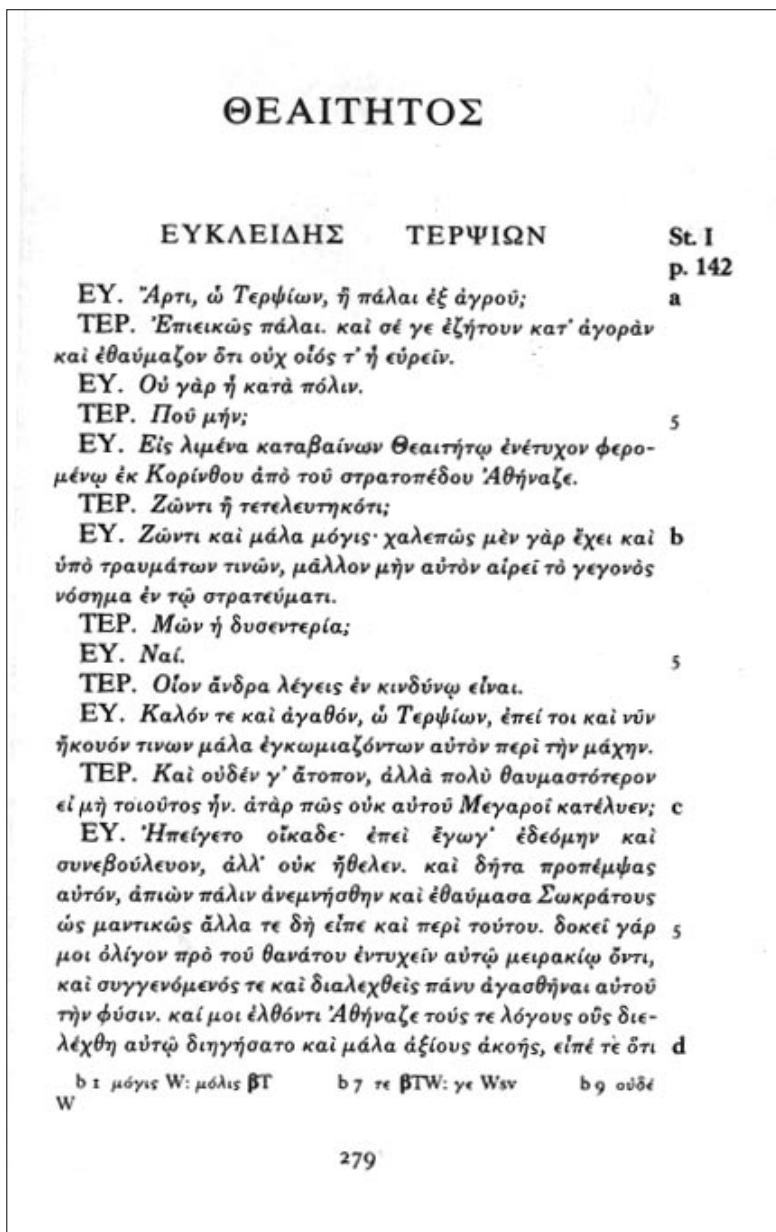
ケンブリッジ大学の鉱物学者E・D・クラークが、旅の途次に立ち寄ったパトモス島のアポ

カリュプス派修道院で、たまたまそれが床に転がっているのを拾い上げたとき、写本は（彼自身が「旅行記」に記しているところによれば）「湿気と虫の餌食になるにまかされ」ほとんど消滅寸前の状態であった、とのことである。それは、数年をへて、オックスフォード大学のボドレー図書館に納められる。1820年にTh.ゲイスフォードによる校訂の結果が公表されると、ただちにその卓越性が一般に認められた。まぎれもなく、それは、伝存する最古のプラトン中世写本であった（奥書に「御創世から数えて6404年の11月、写字生 Johannes がパトライの補祭 Arethas の委嘱により筆写せり。その報酬は…」とあり、ビザンツ教会暦によって換算すると、西暦895年に書写されたことになる）。写本作成を委嘱した「アレタス」は、後にカエサリアの大主教にまでなった著名な人物である。筆写はきわめて美しくつたんねんになされているうえに、おそらくはアレタス自身の手によると思しい訂正や欄外古註（スコリア）も書き加えられている。当然ながら、B写本の意義はほとんどセンセーショナルなまでに喧伝され、暗黙のうちに絶対的な有力校本と見なされつつあった。

しかし、ベッカーの先駆的活動を継承した次世代の人たち（M・シャイツ、J・クラルなど）は、彼がわずかに散見しただけのこの写本を校訂作業の中枢に繰り入れることによって、その真価を正當に評価するとともに、それとの対比において、むしろ他の写本のそれぞれに固有の存在意義を明らかにしていった。ベッカーの「量」に対して、写本の「質」を究明したのは彼らである。有力な



奇跡的発見によってもたらされたプラトンB写本（『ソピステス』冒頭部）



最新版『プラトン全集』の版組(1995 Oxford, 『テアイテトス』冒頭頁)。欄外の数字は、むろん、ステファヌス版の頁付けを示す。

対抗軸が定まることによって「系図」も明確になり、プラトンのテキストの校訂水準は飛躍的に高められた。最も遅れて西欧の古典学世界に登場した最古のB写本が、19世紀プラトン研究の強力な牽引車となったと言ってよからう。

\*

B写本発見からちょうど100年、次の世紀の変わり目にまたがった1899年から1906年かけ

て刊行されたオックスフォード版『プラトン全集』(J.バーネット校訂、全5分冊)は、そうした19世紀古典文献学の成果の集大成に立つもので、今日それは、実質上ステファヌス版にかわって新たな「標準版」の役割を果たしている(むろんその欄外にもステファヌス版の頁付けが付されているが)、さらにそれから100年、目下新たなオックスフォード版『プラトン全集』の刊行がD. B. ロビンソン、E. A. デュークらの古典文献学者グループによって進められており、その第1分冊が1995年に刊行された。全5分冊が完結するのは、いまだ遠い先であろうが、より網羅的で完全な写本調査を踏まえて校訂されたこの成果は、ひとまず近代の古典文献学の理想を可能なかぎり実現したものとさえいえる。しかし、それが最良のプラトン原典として、さらに新たな「標準版」となりうるか否かは、なお今後の評価に俟たなければなるまい。そもそも、このようにして追い求められてき

た最良のテキストなるものが、理念形として以上にあるのかどうか、はたして実際にわれわれは、9世紀のアレタスや16世紀のステファヌスが手にしていたものよりも格段にすぐれたテキストを目の前にしているのかどうか、をも問いに付しながら...

(うちやま かつとし)